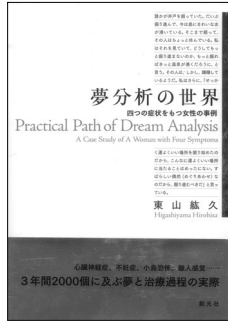


東山紘久著
『夢分析の世界——四つの症状を持つ女性の事例』
(創元社 二〇〇七年九月)

※
長野 真奈



軽い離人的感覚」と女性性の成熟に関する百六十余りの夢が症状ごとに分けられて紹介されており、夢の一つ一つに著者の見解が添えられている。

三年間週に一回一時間のペースですすめられたこの面接では、実際には一八〇を超える夢が報告されたようだ。平均すると一回の面接で一〇以上の夢が報告されていたことにな。事例概要は後述するが、このようなペースで夢の報告が

本書は、二十数年前に著者が携わった、ある女性の夢分析事例がまとめられたものである。まえがきにある通り、「一人の心理療法家の一事例を述べた」稀有な書である。クライエントが抱える四つの症状(心臓神経症・不妊・小鳥恐怖・

繰り返された結果、それまで苦しんでこられた症状の消失、女性としての成熟、親子関係の改善、夫婦関係の改善、職場での対人関係の改善をみて終結を迎えた。症状が形成されそれにさいなまれること、一八〇〇の夢を見、書きとめ、報告すること、それを聞き、理解し、まとめること、そうすることで夢が展開し症状が改善していくこと、どの過程にも相当なエネルギーがそがれている。著者は執筆を振り返り「彼女の夢をもう一度読み返し整理するのに、多大のエネルギーが必要だった。人間の心がもつエネルギーはそれほどおおいのである。内的世界の統合に向けて、使わねばならないエネルギーは膨大なものである。」と述べている。そのエネルギーがどれほど大きなものであったのかを知るには本書を読み体験するのが最良の方法であろうが、夢の一部を抜き出したものからもエネルギーの大きさとその変容をみることでできそうだ。左は、分析の終結後に手紙で報告された夢の一部である。

「:登りながらハッと、この山の向こうに海があるのではないかということに思い至ります。分析を受け始める直前の夏とてもしんどかったときに見た夢の中の海(このように山の階段を登っていくと、山の向こうが海で、海は真夏なのに雪に覆われ、凍っていた)と、同じ海があるに違いない。——中略——登りつめると、眼下にはあの海が開けていたのです。——中略——あそこが夢では雪の原になって凍りついていたなあと

※甲南大学大学院人文科学研究科博士後期課程在籍

私は思い返しています。今は穏やかに波打っていました。…」分析前に夢に現れた海は真夏の暑さの中で凍り雪が積もっていた。海水が熱くなっているならまだしも（それも大変だけれども）その逆である。エネルギーが無理な方向に過剰に用いられていることが伺える。このような夢を見る時の夢見手は現実場面をこなすエネルギーが足りない状態になるのではないだろうか。現に面接初回のクライエントは「顔色が悪く、全身に疲労と倦怠感がただよっていた。同時に、必死に心理療法を求めていることがうかがわれた」とある。症状形成にも随分なエネルギーがそがれているのである。それが分析終結後の夢に登場した海は穏やかに波打っている。そこには必要なエネルギーが必要なだけある感じがする。終結期には先述したような改善がみられ、その変化は周囲が驚くほどのものであったようだ。夢を報告する機会を得、そこにエネルギーを注ぎきれたことが症状の融解、そしてエネルギーの程よい流れにつながる一要因であるように思われる。

ではセラピストはどのような姿勢で夢を聞いていたのだろうか。

セラピスト（著者）の立場

「夢見者中心、夢中心の考え方が重要だ」というのが著者の主張である。これはロジャーズ研究所留学で学んだものをオリエンテーションに帰国後夢を心理療法の中心素材にし始めた結果至った考えのようだ。夢がどのように現れ、夢見者が

どのような姿勢で夢と関わっているかによってアプローチが変わるのである。著者の夢に対する基本的な態度は左の通りである。

- (1) 夢の意味は夢に聞け。
- (2) 夢見者に十分夢を語らせる。
- (3) セラピストは対話を聞くように夢を聞く。
- (4) 夢が語られたときセラピストとクライエント双方に湧き上がってくる感情が納得されるように、夢を介して夢見者とコミュニケーションする。
- (5) 夢は見ることに第一の意味があり、夢は人に語られることで意味を増し、夢は聞いてもらうことによって意味が促進される。
- (6) 夢はカタルシス効果から深い気付きを経て、夢がくれたメッセージを生きたことへとその意味を拡大する。
- (7) 夢には夢見者が夢を現実世界で生きる方向と、夢の世界のものを夢の世界に帰す二つの方向がある。

(8) 夢には個々にその特徴があり、特長によって意味を付与するセラピストの方法が変わる。

(9) 夢が語られる状況によって夢の扱い方が変わる。

(10) 夢見者のそのときの夢に対する態度でセラピストの夢に対する態度も変わる。

(11) 夢は夢中心、夢見者中心で取り扱われる必要がある。

(1)、(2)、(3)が先述した夢見者中心、夢中心の基本的態度について述べられたものであろう。(4)はクライエントとセラピストとの関係性についてジェンドリンの言う体験過程を背景に述べられているように思われる。(5)、(6)は夢をみることの意味について、(7)は夢の質と対応の仕方について、そして(8)、(9)、(10)、(11)は再び夢見者中心、夢中心の態度について述べられている。夢見者・夢中心に始まり、夢見者・夢中心に終わるのが基本姿勢だということなのだろうか。

本事例では、「夢で表現されるクライエントを現実のクライエントの分身」として理解し、夢を通して体験過程や感情を話してもらおうという姿勢で夢分析は進んでいった。これは夢に表現される豊富なイメージが、感情を切り離れたような調子で語られたり、又、連想が語られることがほとんどなかったことを受けて打ち出された姿勢であった。記憶され記録さ

れた夢を語られるそのままに聞いていくということが続けられたのであった。夢が感情を伴って語られるのには約二年半の年月が必要だったようである。ここでも分析前の夢に登場した真夏に凍った海が思い起こされる。水の下の海（感情？）が安全な状態で姿を現すのには相応の時間と分析の過程が必要だったのだから。

さて、これまでは著者が夢を聞く際の姿勢をみてきた。それでは夢の内容理解に関してはどのような切り口が用いられているのだろうか。著者の書いた別の書『プロカウンセラの夢分析』（創元社、二〇〇二年）では夢を読み解くにあたり「なぜこのような夢をみたか」「現実と夢との違いはどこか」を吟味することの大切さが説かれている。本書のところどころにもこの問いかけが繰り返され、ことに夢内容と現実場面との関連付けが多く強調されているように思われる。これは「他者や状況との絶え間ない相互作用としての体験過程」（『体験過程と心理療法』（E. ジェンドリン・村瀬孝雄訳、ナツメ社、一九八一年））として夢を聞くという切り口であり、先に述べたこのクライエントの在り方にあわせた切り口でもあるのだろう。基本的態度七にしめされた「現実の世界に生きる方向」である。

四つの症状の改善と女性性の成熟に関する夢分析

いよいよ事例に入る。クライエントは来談当時二十九歳の既婚女性。直観優位で頭の回転が速い、どこかに過剰適応とが

ばり過ぎがあるような印象をセラピストは持っていた。心臓神経症の悪化にともない日々の出勤もままならなくなつたのが直接の来談理由である。夢分析が始まつた詳しい経緯は書かれていないが、初回と二回目の面接に語られたいわゆる初回夢は、聞き手を得て分析の課題や展望を表した。興味深いのは症状に関する夢の現れ方である。三年の過程を六つに区切り各時期に報告された夢を症状ごとに分けると時期によって多く現れたり少なく現れたりする症状夢があり、症状がおさまるにつれてそれに関する夢が減るのである。これを受けて著者は「心因性の症状は非現実的な世界に存在するのがふさわしいものが多い。夢も非現実の世界である。非現実的な症状を非現実的な夢にリアルに見ると症状が軽減されるか消失する、という事実がある」と述べている。症状が夢を通して非現実の世界に帰るので。実際、夢には心臓神経症の症状と同じように苦しくなったり、離人感に不安を覚えたり、フワフワした小鳥にゾツとしたり、妊娠したりするクライエント自身が登場する。そしてその後現実場面での症状が改善する。基本的態度七でしめされた、「夢の世界（非現実の世界）に帰す方向」である。それぞれの症状にはそれが形成された理由があり、それをうかがい知ることができるのも本クライエントの夢の特徴であった。心臓神経症には大切な人との別れが、小鳥恐怖には母子関係の問題が、離人症は小鳥恐怖の恐さが、不妊症は夫婦関係、親子関係、女性性の成熟が関連していることが夢で示されており、症状形成の時期とレベルによって症状消失の時期が異なってくる。症状消失の順番は心臓神経症、小鳥恐怖、離人症、不妊症であった。症状

が形成された理由が発達課題的にみて時期が後であるほど症状は早期に消失した。そして夢分析過程全体を通して取り組まれたのが人間的成長の課題、女性性の成熟というテーマだったのである。

人間的成長の課題、女性性の成熟という範疇に入っている夢には海が比較的多く登場しているのが印象的であった。先に引用した最後の夢にも海が登場する。真夏に凍る海が穏やかに波打つに至るまでには紆余曲折あったようだ。左は海が登場する夢の抜書きである。

・雨と共にご飯が降ってくる。老婆は海水で手をぬらして塩をつけそれをお握りにする。そのやり方に私は納得する。

(夢一八)

・私はいすにこしかけて海の上の空中をとんでいる。宝船が見え追いかけるが見失い、船は遊泳禁止の線を越えてむこうへ戻っていく。私はその線を越えられない。(夢一〇九)

・私はミルクソーダの海の真っ只中にいる。青い海の白く泡立った部分がミルクソーダの海である。(夢二一八)

・私は黒髪の少女になっている。少女は紺碧の海に身を投げたしまったかもしれない。(夢二六〇)

・私は「あの世」へ行ったら、水蒸気になって海から昇り、地球を包もうと思う。そのイメージを体で感じる。私はこれは死ぬことだと納得している。(夢五三七)

・小さな海(水たまりのような)。私は海中に住む生き物に餌

をやっている。その内の何匹かは海からはい出して行く。
(夢八七九)

このように抜き出してみると、海はもちろんのこと、海と私の関係の展開も興味深い。私の印象を言葉にしてみた。誰が降らせたのか雨と共にご飯が天から降ってくる。それを老婆は海水と共に手の中に収める。そして私はそのやり方に納得する。私はいすこしかけて飛ぶことで海を上から見る。それは宝船を発見するに匹敵するほどのことであるようだがもう一步のところで線を越えることができず海全体を見渡せない。ミルクソーダの海はおそらく白い上にあまり塩分を含んでいなさそうだという意味で海とは別のものであり、かつその一部でもあるのだろうか、更に異なるもの、又は一部として泡の只中にいた私は、黒髪の少女になり海に身を投じる方向に動く。そして海から昇って水蒸気になり地球を包む。老婆が海水で塩味をつけてお握りをにぎるように。これは体で感じられるイメージとして実現される。そして死の在り方に納得する。先の雨はこの水蒸気から降ってきたのだろうか。こうして海、又は世界を包むまでになった夢自我には海が小さく見える。そしてそこに住む生き物に餌をやる。天からご飯を降らせるのだ。

そして私が最も注目するのは、その海から虫がはい出すところである。それまで、海もしくは世界に対して私は、器であり中身である世界を展開してきた。それが自己完結的に繰り返すように思われるのだが、その循環をやぶるように虫は

出ていくのだ。

今回、夢を学びたいという想いで本書を紐解いた。著者の姿勢はもちろんのこと、公にする決心をなされたクライエントさんの夢から多くをえることができたと思う。敬意を表しつつ筆をおきたい。

本書は、『女坂―夢分析の世界』（ミネルヴァ書房、一九九四年）を一部加筆修正し復刊したものである。

(ながの まな・臨床心理学)

